

1 単元名 「レストランをひらこう」(全20時間)

2 単元目標

- 収穫した梅を調理して食べる活動を通して、作ることの楽しさを感じることができる。
- 友だちとレストランを開店するという活動の中で、今までの経験を思い出して、自分なりの考えを持ったり、新しい考えやアイデアを見つけたり、真似したりすることができる。
- レストランを開くという目標に向かって、話し合いをしたり、準備や練習をしたりする活動を通して、みんなで作っていく楽しさを味わう。
- レストランを開くことにより、お客さんと関わり合い、喜んでもらえた満足感や、頑張ったことを認められた喜びを味わい、次の活動への意欲を高める。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

～どのように「ひびきあう三の丸の子どもたち」をめざしてきたか～

今年度も、朝の会・生活単元・体育科・音楽科・外国語などで一緒に活動や学習をすることを多くしてきた。それぞれの学級の実態は違い、支援の仕方が違う点もあるが、12人が共に活動する中で、豊かなかかわりができ、それぞれの思いが少しでもひびき合うのではないかと考えたからである。

本単元では、昨年度行った「アロハ マハロ レストラン」を開いて楽しかった経験や喜んでもらえた思いを振り返りながら、「レストランを開きたい」という思いをみんなが持ち、その思いを大切にしながら話し合っている。低学年の子は、自分なりの表現方法で思いを伝えようとし、聴いている児童も何を言おうとしているのか受け止めながら、聴いている。高学年の子は、今までの経験をもとに低学年の子に分かるように伝えようとしている姿が見られるようになってきている。

4 単元と指導

(1) 単元について

子どもたちは、5月に小田原城址公園にさくらの木を見に行った際、青い梅の実がたくさん落ちていることに気がついた。そこで、梅の木には、梅の実ができることを知った。6月に小田原城址公園の梅の実を収穫できる機会があり、子ども達は、はりきってたくさんの梅の実を収穫してきた。たくさんの梅をどうしていきたいのかを尋ねると「梅ジュースにしたい」「食べたい」と意見が出てきた。5年生の子は家でインターネットを使って、梅ジュースのつくり方などを調べてきた。子ども達は、収穫した梅の実がどんなものに変身するのかワクワクしていた。実際に梅ジュース・梅ジャムを自分たちで作り、梅が加工される様子を見て、梅ジュースや梅ジャムを味わい、おいしさに驚き、作った喜びを感じることができた。それぞれの子が、たくさんできた梅ジュースや梅ジャムをいろいろな人にも食べてもらいたいという気持ちをもっている。そこで、昨年度レストランを開いて、いろいろな人に食べてもらった経験を思い出し、「レストランを開きたい」というみんなの切実な思いから、この単元がスタートした。

発表することを通して、見てもらえた満足感や認められる喜びを味わえた子どもたちは、活動への意欲を膨らませて次の活動にも取り組んで行かれるだろう。

(2) 指導について

＜切実な問題について＞

本単元ではまず梅を調理した活動を思い出すことから始まる。子どもたちは実際の梅ジュースや梅ジャムを見ながら活動の様子やおいしさを思い出すことができる。そこで、おいしかったこと・たくさん作れたことなどを話すうちに、「いろいろな人にも食べてもらいたい」という思いが強くなってきた。また、昨年度行った「アロハ マハロ レストラン」を思い出し、「レストランを開きたい」という思いがどの児童にも生まれてきている。1年生にとっては初めてのことだが、他の児童の「レストランを開くのは楽しい」という思いが伝わり、「やってみた

い」という思いが生まれてきている。また、「誰に」という視点が加わり、相手を意識することで更に「食べてもらいたい」「来て欲しい」という思いが膨らんでいる。理由を言える子には言わせることで、思いやねらいがはっきりしてくることを期待している。

子どもたちのほとんどは、すぐにレストランができると思うだろう。「すぐにできるかな。」と問いかけることで、おや？と考える子が何人かいるだろう。「準備が必要」「練習をしなくちゃ」「喜んでもらうために〇〇しよう」という思いから、準備や練習の必要性に気付くのではないかと思う。また、「自分たちの力でできるのか」ということを投げかけ、自分たちがやりたいことと自分の力でできることがあるということに気付かせていきたい。さらに、お客さんの立場に立って準備を考えられるようになってほしい。

話し合いを積み重ね、繰り返すことで聴く・話す姿勢を意識させていきたい。常に話し合いでは、何を考えたらいいのかを確認しながら、進めていきたい。友だちの考えを聞いて同じだったら「賛成」「いいね」「私は・・・」など、自分の気持ちを伝えられるようにしていきたい。聴く時にも、話している相手を意識させて聴くように支援していきたい。

<ひびき合いについて>

話し合いは、数名の子どもの意見で進んで行くと思われる。特に知的障害支援級の子どもにとって話し合いは難しい。話し合いが難しい子どもたちは友だちが言ったことの真似でもよいこととし、その子たちが意見を言えるように指導者が支援をしていくようにする。話し合いが進む中で、意見をまとめなければいけない時もある。そのような時には、少数意見にこだわっている児童の考えを認めて、話し合える雰囲気を作っていく。

話し合いの中では、レストランを開くための準備や仕事について気づかせ、さらに、看板・招待状などの細かい準備や当日の役割分担に気付かせたい。なぜその仕事が必要なのかを話し合うことや実際に動いてみることで、レストランに対する期待感やイメージが膨らむのではないかと考える。また、振り返りの活動の中で友だちと意見を交流することで「みんなで協力したから、成功できた」というみんなで作り上げる楽しさを感じられることや、「また、やりたい」「喜んでもらえて嬉しい」という気持ちが更に高まることが個学の子どもたちにとってのひびき合いと捉えている。また、準備や練習したりすることでみんなで作っていくことの楽しさを味わってほしい。

話し合いの内容の理解や、イメージをもったり膨らませたりすることが得意ではない子どもたちであるので、実際に動くことで、活動の様子についてのイメージを持ちやすくしながら学習を進めるようにしたい。

6 本時について

(1) 目標 レストランに必要な仕事の内容を知ることができる。

(2) 展開

分	主な学習活動	主な支援・留意点
5 30 40	1 決まったことを確認する。 2 みんなから出た仕事の内容を実演を交えて確認する。 入口 渡す人 レジ 作る人 案内 注文 3 困ったことやもっと工夫したほうが良いことを話し合う。 ・どこが受付なのか分かりにくいから、受付やメニューの場所が分かる看板があったほうが良い。 ・メニューに写真があったほうが良い。 ・受付では、何をするのか。 ・レジの人は、何をするのか。 ・案内は、どうやってするのか。 4 どんな仕事だったかを確認し、次の時間はどんな仕事をしていくか決めることを伝える。	○前時までに決まったことを掲示し、全体で確認していく。 ○教師・支援員がお店のお客さんになり、困ったことを伝える。 ○初めての子にもわかるように、実際に動いたり、言葉を言ったりしながら確認する。

★授業の詳しい流れ

分	主な学習活動	主な支援・留意点
5 30	1 決まったことを確認する。 ・お店の名前（お花がいっぱい・ありがとう） ・メニュー ・場所 2 みんなから出た仕事の内容を実演を交えて確認する。 入口 渡す人 レジ 作る人 注文 案内 ★場所は、前時に確認したように設定しておく。 ★児童の座る場所は、あいているところ。（椅子のみ？） ★困ったことやもっと工夫したほうがいいことを話し合いながら、進める T：入口の「いらっしゃいませ」はどんな仕事？ C：入口のところで、「いらっしゃいませ」を言う仕事。 T：一人で言うのかな？ C：みんなで言った方がいい。 C：みんなも言うけど、係の人がいてもいい。 T：みんなで言うなら、この仕事はなくてもいいかな。 気持ちのいい挨拶ができるといいね。 ①お客さんが、入ってくる。 T：みんなは、どうすればいいのかな？ C：あいさつをする。「いらっしゃいませ」という。 T：どんな挨拶をしたらいい？ C：気持ちを込めて挨拶をしよう。 T：お客さんに何に困っているのか聞いてみよう。 T：どこへ行ったらいいのか分かるようにするにはどうしたらいい？ C：看板を作る。 C：案内をする。 T：どこに案内したらいい？ C：「どうしたんですか？」と聞く。 ★実際にどうやったらいいのかを児童にやらせよう。 ★子どもたちの話し合いでは出なかったが、場所を決める時に出てきた「注文」を受ける人が必要だったことを確認する。 T：注文の場所が、すぐにわかるようにするにはどうすればいいの？ ②お客さんは、メニューを見ながら困っているみたい。 T：何に困っているのかな？ C：何にするか、悩んでいる。 T：お客さんに聞いてみよう。 T：どんなメニューにすればいいかな？ T：受付の人は、どんな声をかけて、どんなことをすればいいかな？ C：「何にしますか？」と聞く。 C：メニューを見せて説明をする。 C： ③レジの人は、何をするのかな。 ④商品は、いつもらうのかな？ ⑤案内は、どうやってするのか。 4 どんな仕事だったかを確認し、次の時間はどんな仕事をしていくか決めることを伝える。	○一人ひとりに、話の聞き方支援。 ○教師・支援員がお店のお客さんになり、困ったことを伝える。 ☆お客さん（ ） ①入口に入って困った様子でいる。 →どこへ行ったらいいのかわからない。 *どこが受付なのか分かりにくいから、受付やレジの場所が分かる看板があったほうがいいことに気付かせる。 ②受付へ行って、メニューを見ながら、困る。 →どんなものなのか分からない。 *メニューに写真があったほうがいいことに気付かせる。 *受付では、何をするのか気付かせる。 ③レジのところへ行く。 ④どこへ行ったらいいのか、迷う。

7 実践を終えて

(1) 単元構想について

単元を進めるにあたっては、子どもの思いや願いを大切にしてきた。それが、単元構想として出来上がっていった。なかなか自分の思いを持てない子が多いため、子どもたちから「〇〇したい」と思いをつなげて単元を作り上げることは難しい。しかし、共通の経験が子どもたちにとって、イメージや思いをふくらませるための大切な土台となっていた。2年生～6年生は、昨年度の経験を思い出しながら「今年も〇〇したい」「今年は〇〇したい」という発言が出てきた。その発言を受け、イメージが持てなかった子も昨年度のことを思い出しながら「私も△△がいいです」と自分の思いを伝えられるようになっていった。

また、大きな流れを考えるだけでなく、スモールステップで毎時間ごとの話し合いや活動が積み重なるようにしてきた。子どもたちに分かりやすいように前時までのことを確認し、今は何をしたらいいか（この時間にする）を明確にするようにした。一つ一つの積み重ねが、子どもたちの次へのステップとなり、生きる力となっていたと思う。

そして、単元構想をたてたことで、教師も子どもたちも見通しを持って活動に取り組むことができた。特に、担任と支援員がチームで取り組んでいるため、どんな流れで進んでいこうとしているのかが見えやすかった。

(2) 「切実な課題」について

「レストランを開きたい」という子どもたちの思いは、話し合いを重ねてふくらんできた。しかし、一人ひとりがどこまで、切実感を持っていたのかは分からない。思いがふくらみ、実現させたいという願いは持っていたが、それを切実感とっていいかどうか疑問である。それは、話し合いの中でも見られた。自分が気になる課題には反応するが、自分が気に留めてないことには、自分の問題として話し合うことができない。一人ひとりが課題意識を持続することが難しいという現状がある。食べる場所を考える場面では、自分のことだけでなく、お客さんにとってどうしたらいいかを考えられている子もいた。

レストランの仕事について考える場面では、経験からイメージを持てている子にとっては、安心感はあったかもしれないが、その仕事が必要だという「切実感」はあったのか。

「切実な課題」をどのように自分にとっての課題として捉えさせていくかは、これからの私たちの課題としていきたい。

(3) 「ひびき合い」について

話し合いの際には、写真を提示したり、今までの話し合いの流れが分かるような掲示をしたりするなどそれぞれがイメージを持ちやすいように工夫をしてきた。また、なるべく一人ひとりの思いを表現できるようにしたいと思い、話し合う時間を積み重ねてきた。言いたいことを表すことに時間がかかったり、相手にうまく伝わらなかったりしたこともあったが、何度も話し合う中で伝えたいことを分かろうとする聞き手側の態度が育ってきた。話し手もみんなに伝えるためにジェスチャーを交えながら話したり、分かりやすく具体的に伝えたり、理由を付け加えて話すなど自分なりに伝えようとしていた。それは、相手のことが分かってきて、自分の思いを出しても大丈夫という「安心して話せる雰囲気」が少しずつ生まれてきたからだろう。子どもたちの間の人間関係の形成が様々な場面での「ひびき合い」に大きく影響すると思った。

自分の思いを伝えようとすることは少しずつできるようになってきたが、話し合いの中で子どもたち一人ひとりの思いの発表にとどまってしまうことが多かった。友達と関わって話すことは難しい子もいる。「ひびき合い」は、個々の課題があるため、その子に合わせた支援をしたり、お互いにフォローしたりしながら進めていきたいと思う。

1年間の生活単元学習を通して、様々な話し合いの場面を設けてきた。単語でしか話せなかった子も自分の言葉で伝えようとするようになり、高学年の子は低学年にも分かりやすい理由をつけてみんなのことを考えた意見を言えるようになってきた。その意見を聞いて、低学年の児童は納得したり、自分の考えを変えたりする姿を見ることができるようになってきた。

これからも、互いに認め合えるような「ひびき合い」の姿をめざして取り組んでいきたい。